

コロナ禍における法文学部の 被災記録の収集と保存Ⅷ

— 2022年度学生座談会報告書 —

青木理奈・鈴木 静・福井秀樹
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子
池 貞姫・十河宏行・中川未来

1. はじめに

新型コロナウイルス感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曾有の災厄である。愛媛大学も、急速に進む感染拡大に対応し教育提供体制が激変して、その後紆余曲折をへて対面授業に戻ってきている。しかしコロナ禍前とは異なる局面が、さまざまに生じている。

今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになるだろう。なにより、今のコロナ禍において刻一刻と事態が変わっていく中、時系列で保存できるよう、記録はコロナ禍の初期から継続的に収集することが重要であると考えている。

本プロジェクトは、今回の未曾有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。これまで、愛媛大学法文学部の学生を対象としたアンケートを2020年度¹⁾、2021年度²⁾、2022年度³⁾に実施、学生手記を収集・分析⁴⁾、座談会を開催⁵⁾することにより、コロナ禍初年度からの学生生活を分析し記録として保存してきた。また、海外大学におけるコロナ対策や学生意識との比較も行ってきた⁶⁾。

今回の調査は、2020年度から2年間にわたり続いた遠隔授業から対面授業へ転換した2022年度の大学生活について、学生にとって良かった点や辛かった点、大学に改善を求める点をテーマとした座談会形式で学生の声を集めた。今年度は、社会共創学部

教員の協力をえて、社会共創学部学生も参加した。各学部での相違する点があるか否かを見るためである。なお、教員も座談会に加わり、学生の積極的な語りを引き出すことにより、コロナ禍における大学生活の実態の解明——特に学修状況や私生活状況の把握——を試みた。

2. 対象と方法

本調査の対象は、法文学部および社会共創学部の学部生であり、調査日時、出席者は以下の通りである。

(1) 座談会および参加者の概要

日時：2023年2月24日(火) 10:00-12:00

開催形態：対面およびオンライン（Zoom ミーティングを使用）の併用

出席学生：10名（男性4名、女性6名）

ID	学年	性別	法文学部は 昼夜間主の別	法文学部はコース
A	2 回生	男性	昼間主	法政
B	2 回生	男性	昼間主	法政
C	2 回生	女性	昼間主	人文
D	2 回生	男性	社会共創学部	社会共創学部
E	2 回生	女性	社会共創学部	社会共創学部
F	3 回生	女性	昼間主	法政
G	3 回生	女性	夜間主	人文
H	3 回生	女性	昼間主	グローバル
I	4 回生	女性	夜間主	法政
J	4 回生	男性	昼間主	グローバル

(2) 座談会の共通テーマ

今回の座談会では、「コロナ禍における大学生活について」を共通テーマにし、以下の3点につき学生に発言を求めた。①1年を通じて大学生活はどうであったか、②対面授業が始まったことによる変化や辛いと感じたこと、③今後、大学へ望むことや将来に向けて今頑張っていること、コロナ禍が収束したらやりたいことなどである。

(3) 倫理的配慮について

本調査において、対象者には、以下の内容を口頭で伝え、倫理的に配慮した。座談会冒頭において、本調査の趣旨を明確に伝え、論文等で公表すること、録音することを依頼し同意を得ている。本稿での発言は全て匿名とし、公表する発言内容は、事前に学生それぞれに確認している。学生が発言内容について削除を求めた場合には、応じている。

一今年度一年を通じて大学生活はどうであったか。

学生 J (男性・4回生・昼間主)：一言でいうと良い大学生活を送れた。4回生でこの3月に卒業するが、最高の一年であり、後悔のない大学生活を送れた。ゼミの勉強がすごく好きで、先生とも討論をしたのがよかった。対面授業に切り替わり、すごく話しやすくなった。ディスカッションは ZOOM だと難しかった部分もあったが、対面になり普通になり楽しかった。

学生 B (男性・2回生・昼間主)：対面授業になって、友達との交流ができて、いい一年になった。ただ、まだディスカッションや、発言することに躊躇される先生方もいた。感染防止の規制はまだ続いているのかと思う。友達のことだが、去年までオンラインだったので、友達作りが遅れてしまい、学校に行きづらくなったという人もいる。サークル活動もまだ結構制限がかかっている。音楽系サークルに所属しているが、発表の時もマスクをしないといけなかったり、移動する際も団体で移動したらダメという規制がかかったりして、不便だった。会食することに対して、規制が少し緩和されたのがよかった。学食（大学食堂）のスペースは狭いのは気になる。

学生 C (女性・2回生・昼間主)：環境面で充実した年になった。一年越しにやっと大学生ライフを送ることができた。「これが大学生なんだ」と思って、高校までにはない100人近くの学生と一緒に受ける講義だったり、ゼミとかも含めて少人数での講義で意見を言い合うという講義がよかった。高校までは経験したことがなかったので。時間の使い方は、去年より考えながら使うことができた。大学の授業、バイト、サークルとかを充実させることができた。両立することは大変だったが、生活のリズムが整えられた。

学生 E (女性・2回生・社会共創学部)：今年に入って、対面授業とかが増えて人と話す機会が増えて、これまで話したことのない人とも話せたりして良かった。朝起きる

のが辛かった。オンライン授業だったら、朝起きて5分とかで、パソコン開けば授業受けられてたけど、それができなくなった。また、「この授業はZoomのままでいいんじゃないかな」と思う授業もあった。教員の話聞くだけの授業などだ。オンラインの時は、自分の時間が増えて、バイトとか自分の使いたいことに時間を使えた。これまでオンライン授業が多かったので、それにあわせて自分の生活リズムが作られていたので、変更を迫られる今年はずっと部分もあった。

学生 F (女性・3回生・昼間主)：対面になって良かったことは、授業の雰囲気がよくわかることだ。遠隔授業で受講していた時と違って、先生の説明や学生の雰囲気もわかり良かった。それと、授業の合間や大学生協の食堂で、友達と会って「最近、元氣？」みたいな会話ができることも良かった。部活に入っているが、コロナ感染防止の規制が緩和されて活動の範囲が広がった。出場できる大会が増えたが、大学へ出す書類が増えた。それが大変だった。サークルの幹部をやっていたので、部活動と、授業と、アルバイトと、活動がどんどん増えた印象だ。

学生 D (男性・2回生・社会共創学部)：今年一年は、充実していた。授業でも対面が増えて、コミュニケーションが取りやすくなったし、対面のグループワークがやりやすかった。教授の話とかも集中できる環境だった。プライベートでも、友人と旅行に行ったりと充実した一年だった。

学生 A (男性・2回生・昼間主)：去年は、通学は多くても週2回くらいだったが、今期は週4回で、大体一日2コマから3コマ受講した。対面授業が増えたのと、それによって、アルバイトに入れる日数が減ったので、収入減があった。試験についていえば、これまではオンラインレポートが多かったので、レジュメ等を見直しながら、自分の好きなときに取り組むことができた。今年、持ち込み不可で教室での試験が多かったのが、大変だった。しかしレポートより真面目に勉強して、身についたという実感がある。オンライン授業がなくなって、動画で学ぶ授業がなくなったのは残念だった。

学生 H (女性・3回生・昼間主)：今年是对面授業が多くなった。個人的には対面授業の方があっていると思う。オンラインならすべてオンライン、対面ならすべて対面のほうが動きやすい。今年、人と交流する機会も増えたりしたので、その点は良かった。

学生 G (女性・3回生・夜間主)：この一年は、授業の先生と話す機会が多かった。対面授業になり、直接お会いして知った先生が多くいた。対面授業だと、頭に入る量が違うような気がする。オンラインで資料をただ読むだけより、身になったのかなと思う。また、学食では1人ずつ席が仕切られていて、どの席に座るのかを指示する番号が渡される。番号が渡されるのは、仲のよい人が集まって食べないようにするためだが、実際には大人数で集まることはなく、ほとんどが離れて一人ずつで食べていた。番号制はやめて、好きなところに座ってよいと思う。他大学に行くことがあって、学食にも寄ったが仕切りはあったが番号制はなかった。それでも学生は離れて座っていて、問題はなかった。

学生 I (女性・4回生・夜間主)：コロナ3年目で生活に慣れてきたこと、4回生で授業があまりなかったのが、苦しかったとか、困ったとかはなかった。全体的に普通に過ごすことができた。対面授業が再開して、単位取得の必要性はなかったが、せつなくなら最後に何か受講したいと思って、2つ3つ対面授業を受けた。教室の雰囲気とか、他の学生の話し声とか、先生が授業内容に沿って例えば話や雑談とか話してくれるのが、非同期型だと体験できないことで印象に残っている。対面授業の方が、緊張感を持って集中して授業を受けることができたので、記憶の残り方とかも、去年までとは全然違った。対面授業が再開して、本当に良かった。ほかには、生活リズムが整った。朝ちゃんと起きて、外に出てというのが、私にはすごく合ってるっていうのが分かった。社会人になっても在宅ワークは、多分向いてないんだと想像している。

—他学部の授業を受講したことがある人はいるか。法文学部との違いはあったか。

学生 F：社会共創学部の授業を受講したことがある。ゲストスピーカーを招いた授業だったが、授業が始まる前の雰囲気から違った。法文学部の教室は静かで喋る人もそんなにいない。社会共創学部では、まず友達同士が固まって、男の子も女の子も一緒に授業を受けていたのが印象的だった。私は一人で行ったが、一人で行く方が浮くというほどではないが、珍しい感じだったようだ。授業が始まっても、ゲストスピーカーに質問をする機会があり、4～5人から手が挙がって、積極的だった。法文学部だと質問をする人はいないことがほとんどだから、学部によって違うのだと思った。

—対面授業が始まったことによる変化や辛いと感じたことはあるか。

学生 J：少しきつかったことを話す。家から大学まで自転車で30分ぐらいかかるので、

通学がきつい。ほかに、食事に誘われることも多くなり、大学からお店までの移動にも、経済的にも時間的にもしんどかった。楽しくもあるのだが。

学生 D：ちょっと辛かった面は、1限で8時半、2限で10時過ぎに始まることだ。朝なかなか起きられず準備に時間がかかるし、行こうという気になれない時があった。また、今年に入って部活動でも役割が増えて、それ以外にもやる事が結構増えたので、気持ち的に追いつかないと感じることはあった。

学生 B：履修登録するときに、非同期か対面かを判断して登録した。松山市ではなく近隣の市に住んでいて大学から遠いので、1限目に非同期、2限目に同期型だと通いやすいと思い、1限目に非同期の授業を登録した。いざ授業が始まると1限目は同期型に変更されて、1限目から学校にいないと2限目に間に合わなくなった。その上、大学内では8時半から利用できる施設がなくて困った。図書館は9時開館だったので不便を感じた。新しくできたリージョナルコモンズは8時半から利用できるようになり助かった。

学生 J：去年は非同期型授業が多かったので、空いている教室も多くて使わせてもらうことが多かった。今年は法文学部自習室に行ったら、無闇に使うのはやめてくださいと言われた。学校のほうが集中できるのでよく利用する。朝から使える施設は欲しい。

一対面授業をしんどいと感じた人は、具体的にどのようなことをしんどいと感じたのか。

学生 J：大学に来るのがしんどいというだけだ。準備したり、いつも決まった時間に来るというのがつらいだけ。自分はそうではないが。

学生 B：対面の方が好きだが、授業の90分間を集中することがつらい。聞き逃しの不安もあり、90分間ずっと集中することがしんどいと感じることもあった。

学生 C：少人数の授業は、発言する機会があり長くは感じないが、多人数の授業や、先生が話されているだけの授業はちょっと長いと感じる。オムニバス形式の授業も、関心がない分野もあつたりすると、しんどいなと感じる。

学生 F：大学は対面授業だと思って入学しているので、コロナのあの時期が異例だったのかとは思うのだが、就職活動を始めてから、説明会やインターンシップは授業がある時間と重複する。そうすると、この授業がオンラインだったら就職説明会行けたのに、と思った。コロナが始まる前の先輩方は、どういうふうにやられていたのか知りたい。

学生 E：自分は、対面になってきつかったタイプだ。オンラインだったらカメラさえオフにしていれば、何でもできていたので楽だった。それに慣れてしまったのが良くないのだが、対面授業で90分間にわたり座っているのがしんどい。オンラインの時は、この時間にこの課題をやって、その次にこれやろうと、自分で考えてできていた。対面授業になると、それがしづらなくなった。一方、フィールドワーク科目などは、対面で実施できたのはよかった。学生同士の話し合いはスムーズに進められた。

一対面授業になって友達との情報交換が容易になったか。オンラインの時との違いはあるか。

学生 J：意外と違いはない。そんなに多くの友達がいないので、学校に来てもしそんなに情報交換することはない。何人かの友達で情報交換するというのは、対面でもオンラインでも変わらなかった。

学生 B：授業の後に、先生に聞くほどではない疑問を、友達と話し会えたのが良かった。友達と勉強がどのくらい進んでいるのか共有できるのも、対面になってよかったことだ。

学生 C：あまり友達が多い方ではなく、一定数いればいいという考えだ。信頼できる友達がいればいい。私は地元生なので、高校とか中学の同級生が愛大に一緒に入学したら、その子にも聞けるので去年までは新しい友達は作らなくてよいと思っていた。対面になって、新たにできた友達や留学生と交流ができたのは、すごく刺激になった。留学したい人と友達になって刺激をもらった。

学生 A：地元が県外なので、一緒に行こうとしていた友達が入試に落ちてしまい、一人で入学した。1回生の頃は、友達は SNS を通じて作ったが、対面になって、教室で隣の席になった人と友達になった。1回生の頃は情報交換する機会がなく、履修登録をどうしたらよいか理解していなかった。要卒単位を考慮せず履修していた。2回生

になり、友人と情報共有した際に、ミスに気づいて事なきをえた。情報共有のしやすさは、大変重要だと実感している。

学生 E：県外からの入学なので、知り合いが少なかった。まだ2回生なので、今も就職活動の具体的なことは分からないし、資格取得もしていないので不安だ。しかし対面授業になり、友達に相談できて、一緒に勉強をすることもできるようになったので、不安も少なくなった。モチベーションもあがり、勉強を続けようと思う。

学生 D：情報共有という面では、そんなに変わらない。スマホを持っているし、それで分からないところをLINEを通じて聞いたりしていた。対面授業になって、LINEでやりとりのない人から「こういう課題があるよ」など、ちょっとした会話で共有できたりするのは、変わったことだ。私は県内出身だが、同じ学部に来た人はいなかった。1年でオンラインだった分、友達コミュニティを広げることではできなかった。

学生 G：学生同士のつながり以上に、教育支援課職員の方に助けられた。全てにおいてお世話になったが、その人は転勤してしまった。「私は誰を頼りにこれから生きていけばいいの」と不安になった。その後、ゼミの担当教員に助けをいただくようになり、不安はずいぶん減った。

学生 I：4回生なので若干の授業しか履修していなかったのと、友達も多い方ではなかったので、交友関係は良くも悪くも変化がなかった。

—3年ぶりに学生祭が再開したが参加したか。再開をどのように評価しているか。

学生 J：2022年度の学生祭は、食事提供が禁止されていた。それがきつかった。コロナ禍前の2019年度は飲食が可能だったので楽しかった記憶がある。今年はダンスやサークルの出し物は楽しかったが、食事の提供ができたなら最高だったと思う。来年は食事の提供を可能にしてほしい。

学生 B：音楽系サークルに所属している。一昨年（2020年度）は飲食がダメになった。楽器を演奏するだけで、あまり観客がこなかった。それを踏まえ、今年は学祭に参加することをやめた。もう少し飲食制限を緩和されたら、学祭に参加して楽しみたい。

学生 H：私は学生祭に行こうという気になれなかった。

—授業以外の課外活動や就職活動はどうだったか。

学生 J：3回生の時から就職活動を始めた。当時は授業も対面授業が増えてきたので、空き教室を借りて、オンライン説明会を受けたこともある。受けた企業は、どこで面接を受けてもいいよという会社だったので、教室を借りて面接を受けることができた。就職活動に関しては、オンライン賛成派である。本当に便利になってると思う。今は資格試験のための勉強をしている。対面授業が戻ったことで学校に来る機会が増え、「せっかく学校に来たので、ちょっと勉強をするか」と思い、図書館に行ったりしている。

学生 I：今年の就活は、説明会、インターンシップ、適性検査、面接のすべてにおいてオンラインが基本だった。自宅から参加できるし、上だけスーツを着ておけば下は何でもいいから楽だった。一方で、企業の担当者に直接会って、雰囲気を感じたいと思ったので、気になる企業が出ている合同説明会は、行くようにしていた。ある企業の選考の際、面接時にグループディスカッションがあった。自宅から参加していたが、その時に限ってWi-Fiの調子が悪く、みんなの話も聞こえないし、自分の声も届かず、それで選考から落ちた経験がある。それで大学の就職支援課に、オンライン面接できる教室があるかを尋ねたが、ないと言われた。担当教員に相談して、空いてる会議室を使わせてもらうことができた。大学にはオンライン面接ができる教室を確保してほしい。

—就職活動で「大学で力を入れたこと」を意味する「ガクチカ」の回答が困るとよく聞く。就職活動をした人たちは、どんなふうに答えたのか。

学生 J：資格試験の勉強を頑張ったことを伝えた。就活が終わったからわかるが、実績というか、何かすごいことをしたかと聞いているのではないと思う。質問は「頑張ったことは何ですか？」だが、結局その質問で聞きたいのは、その人がどういう人なのかであり、また、どういう頑張り方をするか、どういう性格の人かを聞いている。頑張った内容よりも、どう頑張ったかを話すことが出来ればよいと思う。

学生 I：私も「ガクチカ」に困った。ツイッターで、「このままだと学生時代に打ち込んだものがワクチンだけになっちゃう」というのがバズっていた。それを目にし

て、困っているのは自分だけじゃないんだと気づいた。私も実績があることを書かなきゃいけないと思っていたが、別に他の人のガクチカを見ていてもすごい結果を残している人はいなかった。やはりその人のパーソナリティを知りたいというのが企業の本音だと思った。

学生 H: これから就活を始める私の周りでも、何を言ったらいいかわからないと話している。悩んでいる人が多い。対面授業が始まって、修学支援システムでいろいろな企画のお知らせがあるが、見るだけで参加してこなかった。ゼミや授業で先生から話を聞くなかで、参加することも増えてきた。そういう点では、「ガクチカ」の元になりやすいものを見つけやすいのかな。

—今後、大学へ望むことは、どのようなことか。また、自身が将来に向けて考えていることはあるか。

学生 B: コロナ禍前にサークル活動を活発にしていた経験があるのは、4回生までだ。当時、どんな活動をしたか全く分からないので、現在は再スタートのような感じで頑張っている。大学に望むことは、(愛媛大学が採用する LMS である) Moodle 上に動画や資料を提示してほしい。それは学習の参考や効率化にもなる。会食や外に遊びに行くときのうしろめたさがなくなっているので、サークルの会食とかも気軽にしたいし、活動の幅を広げていきたい。

学生 J: やってみたいことが3つある。1つ目が留学だ。2年生の頃にニュージーランドに行く予定だったが、コロナで行けず残念だった。これから社会人になるので、お金を貯めて留学に行く。長期の休みを取り、海外留学の経験を積んでいきたい。2つ目が、英語の資格取得だ。国連英検という難しい試験があって、今は勉強中だ。さらに勉強して最終的に特 A 級を取れるように頑張っていきたい。最後に会食だ。就職するのは関東圏であり、就職してから、同期や先輩と飲み会をして仲良くなっていきたい。

学生 E: 頑張りたいことは就活だ。まだ分からないことが多くて不安だ。イメージだが、100社受けて1社受かったらいい方みたいな感じか。それくらい辛いイメージがあって怖い。東京の学生は早いうちから頑張っていることを聞くし、なかには1回生2回生の時から色々やってたりするとも聞いている。これからは外に出やすくなると思うから、説明会、インターンシップなど自分から行くようにして、後悔しない結果に

なるように頑張りたい。

学生 C：3回生になったら、留学できたらなと思う。行きたい国の文化を学ぶことも大事だと思うので、視野を広げていきたい。そのなかで自分探しとか、今後就職する上で自分が何に向いているのか積極的に探したい。他には海外に行こうと思っているので、少しずつ取り組みたい。

学生 H：あまり学業ができていなかった状態だったが、今年からやり始めた。学びたいこともさらに出てきたので、積極的に取り組みたい。課外活動も、対面で出来るようになっていたので頑張りたい。

学生 D：やりたいことは3つあって、1つ目が資格を取ることだ。所属している学科では、卒業にあたって一定数の資格が必要だ。その資格を取りたいのと、自分のスキルアップのために、IT系や経済系の資格に挑戦していきたい。2つ目が娯楽を充実させたい。今まで飲み会や旅行ができない現実があったので、大学生のうちに旅行にも行ってみたい。お酒が好きなのでいろいろな人と飲み会をしたい。3つ目が、いろんな環境に行って、新しい刺激を受けてみたい。今年度だけでも留学生が所属ゼミにきたり、災害ボランティアの団体に入った。いろいろな人と話をしてすごく刺激を受けたので、もっと刺激を受けたい。

学生 A：予備自衛官補という大学生でありながら訓練を受ける制度がある。就職にも有利だと聞いたので、4月にこの試験を受ける。そのための勉強とITパスポートという資格も挑戦したい。もう一つやりたいことは、英語圏で実際に英語を使ってみたい。数年前にグアムに旅行に行こうと思っていたが、コロナによって渡航できなかった。コロナが収束したあかつきにはぜひ行ってみたい。

学生 F：次は4回生になるので、就職先を見つけないといけない状況だ。やってみたいことが2つあって、1つは大人数いる中で話す機会を増やしていきたい。理由は、インターンシップに参加する中で、20~30人の前で発表するときに、緊張して普段のように話せないことがあったから。緊張してもしっかり喋れるようにしたい。今回の座談会に参加しようと思ったのも、この一環だ。こういう機会があれば、参加していきたい。もう1つは、年齢が近い人以外と関わっていく機会を増やしていきたい。部活動を通じて、学生支援課の職員の方や大会運営を担う高校の先生など、40代、50代、60代の方と関わる機会が多くなった。そういう方々と関わり、注意を受けたり、アド

バイスをもらうこともあった。そういうことは、就職活動をしていくなかでも、役立つと思う。これから忙しくなるからこそ、コミュニケーションの場を増やしていきたいと思う。

学生 G：TOEIC を毎回頑張っている。点数を伸ばして、最終的にそれを生かせるように短期でもよいので留学をしたい。将来は大学院に進みたい。旅行が趣味なので、旅行を兼ねて自分が行きたいと思える大学院に見学に行きたい。

学生 I：コロナの時期に社会保険労務士の資格の勉強をしていたが、社会人になってもさらに勉強を続けて、いつか資格が取れたらいいと思う。大学に望むことは、就職支援課にいるキャリアカウンセラーの対応の見直しだ。エントリーシートの添削を頼んだが参考にならなかった。これから就職活動する学生は、エントリーシートの添削をしてほしい場合、合同説明会のブースを利用したほうがよい。大学のキャリアカウンセラーより参考になる。また、「今すぐ内定を出すから、これからの就活はやめてほしい」と企業に言われることがあったり、内定承諾書に署名や捺印を求められることも起こりえる。その書類を書いても法的拘束力がないので、自分がこれでいいと思える結果になるまで就活を続けた方がいいと思う。先生方をお願いがある。ゼミや授業でオンライン面接の際に空き教室を使えることを、授業中に口頭で伝えてほしい。修学支援システムからメールが来ても、メールが多すぎて見逃すことも多い。また学生からこんなことを先生に頼んでいいのか悩む人もいると思う。先生の方から言ってもらえると学生も安心できる。

3. おわりに

2022年度は授業のほとんどが対面授業になるなかで、「教室で受ける授業は集中でき、積極的に受講できた」と好意的に発言する学生がほとんどであった。一方で、90分の授業時間を集中することが難しい、遠隔授業時にはなかった通学にかかる時間をストレスと感じる等、この時期特有の気持ちも語られた。

就職活動を行った4回生からは、オンラインでの説明会や選考が行われることが当たり前になった中、自宅で参加する際にWi-Fiの接続状況が不安定になることがあり、大学で空き教室、会議室を借りることができれば心強いとの声が複数上がった。全学的な対応を求めるといふより、個別のゼミ担当教員に配慮を期待するものであり、教員からそのことを伝えてほしいとの要望が出された。

2022年度の特徴は、対面授業が復活する中で、留学を希望する者や大学に来てい

る留学生との交流を通じて、留学に関心を持つ発言が見られたことである。一方で、2022年度から学生祭が復活したが、飲食禁止であったこともあり、より規制緩和を望む声が多かった。これまで遠隔授業が続いた影響から、就職活動で「学生時代に力を入れたことは何か」を尋ねる「ガクチカ」問題も話題になり、4回生から下級生へその質問の趣旨や自身の具体例が話された。2～3回生は熱心に聞き入っており、こうした学年をまたいだ交流の機会もコロナ禍により乏しくなっていたことが推測された。

今回の長期にわたるコロナ禍の経験に照らすと、大学の教育環境は今後も大きく変化し続ける可能性がある。こうした教育環境の変化が学生にもたらす影響には、予測できない部分が多い。教育提供体制の変化が、学生にどのような影響を与えるのか、引き続き注視し、学生側の物理的・心理的負担の軽減を図る必要もあるだろう。今後、他学部や他大学との比較をしつつ、学生の心理的な変化に注目して、引き続き調査を行っていきたい。

謝辞

この座談会開催にあたりご協力いただきました法文学部と社会共創学部の教員、ならびに参加してくださいました法文学部学生と社会共創学部学生の方々に感謝の意を表します。また、この研究は、令和4年度法文学部戦略経費、令和4年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革G P・法文学部採択分）、令和4年度社会共創学部長裁量経費プロジェクト、及びJSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。

- 1) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」『愛媛大学法文学部論集第50号』（社会科学編）。pp.37-68.2021年2月。
- 2) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ—2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果—」『愛媛大学法文学部論集第52号』（社会科学編）。pp.19-54.2022年2月。福井秀樹・池貞姫・青木理奈・石坂晋哉・太田響子・小佐井良太・鈴木静・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部留学生の被災記録の収集と保存—2021年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計・クロス集計結果—」『愛媛大学法文学部論集第54号』（社会科学編）pp.151-184.2023年3月。
- 3) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ—2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果—」『愛媛大学法文学部論集第53号』（社会科学編）。pp.133-150.2022年9月。
- 4) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ—2020年度学生手記の分析—」『愛媛大学法文学部論集第51号』（社会科学編）。pp.93-111.2021年9月。青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ—2021年度学生手記の分析—」『愛媛大学法文学部論集第53号』（社会科学編）。pp.37-57.2022年9月。
- 5) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ—2020年度学生座談会報告書—」『愛媛大学法文学部論集第51号』（社会科学編）。pp.117-138.2021

鈴木 静・青木理奈・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池 貞姫・十河宏行・中川未来

年9月. 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来
「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴー2021年度学生座談会報告書ー」『愛媛大学法文学
部論集第53号』（社会科学編）. pp.133-150.2022年9月.

6) 鈴木静・青木理奈・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コ
ロナ禍における授業提供体制の変化と学生意識ーアメリカ・スタンフォード大学大学院生等座談会報告
書ー」『愛媛大学法文学部論集第53号』（社会科学編）. pp.121-132.2022年9月.